

【論文】

## 棚橋源太郎の教育思想と博物館経営

Gentarō Tanahashi's Philosophy of Education and Museum Management

佐藤 優香\*

Yuuka SATO

**Abstract :**

Gentarō Tanahashi is the founding father of Japanese museums and Japanese museum studies. His career started as a science teacher then became an instructor and a researcher at a teacher's college. He moved to the museum field and was involved in management of museums. During his career, he wrote numerous publications in related fields. Additionally, he was the founder of the Japanese Association of Museums.

This article illustrates the Tanahashi's underlying philosophy on his research and management of museums. First, this article identified his shift of interests through his titles of various published articles. Then, by examining his educational philosophy as a practitioner of science education, his goal of a variety of exhibitions, programs, and publications in museums is discussed. Tanahashi focused to diffuse research-based education using the object lesson by J. H. Pestalozzi and the perspective of science which were based on people's daily lives. Based on his view and practice as an educator and a researcher, his museum practice was not to expand science education but to disseminate scientific thinking throughout the society

### 1) はじめに

「我が邦科学教育・博物館事業の偉勲者なり」(宮崎惇 1992 序文)と評された棚橋源太郎は、日本の博物館や博物館学の基礎を築いた中心的存在であった。その業績は、東京教育博物館の館長としての数々の企画、現在の日本博物館協会となる博物館事業促進会の創設をはじめ、博物館法の制定に尽力し、博物館に関わる多くの著作や論説を著すなど枚挙にいとまがない。

そのキャリアは、理科教育の実践者、理科教育の教授方法研究者からスタートし、高等師範学校の教諭を経て当時師範学校の附属機関であった東京教育博物館の館長を務めたことから、次第に博物館へと関心を移行させていった。すなわち、彼の博物館における実践の基礎は、理科教育

---

\* 国立歴史民俗博物館

---

の専門家として活躍していた時代に形づくられたことが予想される。そこで本論では、棚橋の雑誌論説から関心の移り変わりを概観し、続いて博物館における実践内容を検討しながら、その背景にある考えや経験を探ることで、彼の博物館経営の背景にあった教育思想を明らかにしたい。

## 2) 雑誌記事・論説にみる関心の推移

棚橋は、高等師範学校在学中にはじまり、現役を退いてからも実に多くの雑誌記事・論説や著書を著した。その数は、雑誌にして400件を越え、著書においては36件53冊にのぼる。棚橋が博物館で行ったさまざまな事業をとりあげる前に、彼の雑誌記事・論説を概観することで、彼の関心の推移を確認しておきたい。棚橋源太郎の著作一覧については、荒井孝喜(1991)と佐藤優香(1998b)がある。ここでは後者をもとに加筆し雑誌記事・論説の一覧を再録した。

まず、棚橋の書いた雑誌論説・記事を主にそのタイトルからみていくと、理科教育に関する記事は、1894(明治27)年から1919(大正8)年の間にそのほとんどが発表されている。それは、高等師範学校への入学から、東京高等師範学校退職までの期間にほぼ重なっている。理科以外では、郷土、手工、実科、家事、外国語などの科目に関する記事が、それぞれまとまった数で見られる。これらの記事は、高等師範学校に就職してから、東京教育博物館主事となるまでの期間に発表されている。理科、郷土科、手工科、実科、家事科などは、棚橋のもともとの専攻である博物学に関わりがある。外国語教育は異質だが、理科や実科に関しても外国文献の翻訳や紹介をしており、棚橋の眼がはやい時期から国内だけにとどまらず、ひろく海外にもむけられていたことがわかる。上記以外にも幼児・初等教育に関わるものがあるが、これら学校教育に関するものはほぼ東京高等師範学校に勤務していた間に発表された。まとまった数がみられるテーマとしては、続いて生活改善があげられる。棚橋は、1919(大正8)年教育博物館で開催した「生活改善展覧会」をきっかけに、「生活改善同盟会」を設立し、常任理事を務めた。これに関する記事・論説は、主に1918(大正7)年から1927年の間に発表されている。棚橋は、1924(大正13)年東京高等師範学校を退職(官)し、翌年1年間欧州へ行き、帰国直後から赤十字社参考館の創設に関わり、1928(昭和3)年には、現在の日本博物館協会である博物館事業促進会を創設する。このころをさかいに、博物館に関すること以外の著作物は顕著に減少し、著作物も博物館・社会教育がそのほとんどを占めることになる。博物館・社会教育に関わるものは棚橋の雑誌における著作物全体の約3分の2を占めている。その数の多さ、関わってきた期間などから、生涯で最も関心をよせていた事柄と考えてよいであろう。

こうした棚橋の著作活動の特徴は、次の4つの時代にわけて考えることができる。理科を中心に、郷土・手工・実科など現在の生活科にも相当するような教科に関する記事や論説を発表し、理科教科書と理科の教授方法に関する図書を多く著わした第一期。理科に加えて博物館に関する雑誌記事・論説も発表するようになる第二期。関心が生活改善にひろがる第三期、博物館や社会教育に関することに関心がしぼられる第四期。

第一期は、高等師範学校入学時期から、留学前後までにあたる。内容のほとんどが学校教育、

---

特に理科教育に関わることである。

第二期は、留学前後からのおよそ10年間と考えられる。この時期は、理科や家事科をはじめ学校教育に関する記事や論説が多い中、徐々に博物館についての論説が見られるようになってくる。博物館での研究成果公開のための創刊した『現代教育』での発表が半数以上を占める。博物館をタイトルに冠した雑誌論説は留学より帰ってから見られるようになるが、それ以前の第一期にも博物館について言及したものが見いだされる。たとえば、『尋常小学校に於ける実科教授法』には、東京教育博物館の利用がうたわれている。また、『教育界』の臨時増刊で東京教育博物館の特集が組まれた際には、「動植物及び生理教授用品」をタイトルとしその収藏品について述べられているが、総評と希望として博物館の運営についての提案を4項目あげている（棚橋源太郎 1903 pp129-130）。この論説の前年に刊行された『ヒュース嬢教授法講義』には、学校博物館についての記述があり、この翻訳による博物館への関心のめばえが予想される（内川隆志 2004）。1906年に博物館の主事になってからは、その業務からの関心と関わりがあると予想される教具の研究についての論説が自身も創刊に関わった『教育研究』に出てくるが、博物館そのものについて本格的に論じるようになるのは、留学より帰国して以降であり、その後増えていく。

第三期のはじまりは、家事科展覧会が契機と考えられる。1918（大正7）年11月から東京教育博物館では、6回目の特別展覧会として家事科展覧会が開催された。生活改善に関わる棚橋の論説はそれ以前から主婦に向けた科学をテーマにしたものが見られるが、家事科展覧会以降、生活改善に関わる記事や論説が目立って増える。特に1912（明治45、大正元）年に発表された雑誌論説はすべて生活改善に関するものである。

第四期は、1928（昭和3）年の博物館事業促進会の発足と『博物館研究』の創刊にはじまる。そのころの棚橋は、1924（大正13）年に退官し、1年の欧州留学を経て、赤十字社参考館の創設に関わるようになっていた。第四期に書かれたものは、ほとんどが博物館に関するもので、その多くが『博物館研究』に発表されている。博物館研究の記事には無記名のものも多いが、その中には棚橋が書いたものも多く含まれていたことが予想され、それを考慮すると全体の著作件数はさらに多くなると思われる。また、1930（昭和5）年の『眼に訴へる教育機関』以降、博物館関係の著作を多く著すようになる。

このように、棚橋の関心はそのとき従事していた業務と密接にかかわり、理科教育、生活改善、博物館と移行して行くことが読み取れる。

### 3) 教授方法の研究

続いて、小学校における教授方法についての著作から、彼の教育についての考えを整理しておきたい。棚橋の代表的な著作のひとつである『小学校各科教授法 全』と『実用教授法』は、教師のために授業の方法を具体的に示したものである。これ以外の教授方法についての著作は、単一教科にしぼって書かれているのにたいして、この2冊は小学校で教授する全教科が対象になっているのが特徴である。これらは一年半の月日を隔てて出版されており、その内容は重なること

---

ろが多い。ここでは『小学各科教授法 全』をとりあげて、棚橋の教育にたいする考え方を検討してきたい。

本書は、大きく二編からなっており、第二編において各教科について論じる前に第一編総論として、教授の意義、教授の材料、教授の方法について述べられている。以下は、第一編第二章である教授の材料についての記述である。

教材も、亦各々独立せるものとなさずして、互に連絡し、有機的に組織せざれば、以て何物をも理解せしむるに足らずとす。されば此の方案に於ては、一教科を中心とせず、又二三重要なものをも中心とせず、諸教科は、各々平等の価値を保ちて、互いに相連絡せしめんとす、是米国の教育家「パーカー」の主張する所なり。

教科の統合に関しては、此の他自然・人事の二中心を設けて、総べての教科を一箇の楯的に統合すべしと構ふるあり、諸説紛々として欠せず。然れども形式的教科は総て其の内容を事物的教科に取り、各教科固有の進路をさまたげざる範囲に於て、互に連絡を保たしめ、以て其の全体をして系統的・組織的たらしめんことに努むれば、過欠なかるべし。

(棚橋源太郎 1902 p8)

棚橋は、修身、日本歴史、地理、理科、国語、算術、図画、手工、体操、唱歌、英語と11の教科についての教授方法を示しながらも、それらは個々に独立して教えるのではなく、授業テーマに応じて教科の枠をはずして横断的にとりあつかうよう勧めている。特に4年生までの低学年では、日本歴史、地理、理科、国語の4教科をつねにかかわらせる形での教授法提案をしており、そこでのテーマは「日常目撃スル近易ナル自然物ノ形態生活並ニ人事ニ関スル直観的教授」や「郷土ニ於ケル動植鉱物土地気象住民史伝沿革等」とされている(棚橋源太郎 1902 pp10-11)。すなわち、小学校教育の題材を身近な事物に求め、教科のわくにとらわれず学ばせることを推奨していたと言えるだろう。棚橋は、理科が専門であったが、その教材として身近な事物を取り上げるということから、郷土科も重要視していたことがうかがえる。『小学各科教授法 全』における郷土科についての記述もみてみよう。

理科教授の目的、既に前述せるが如く、自然生活と人類の開化的事業との理解に在り。且其の方法は親しく児童の直観に訴へ、自然物及び其の現象を考察せしめざるべからざるが故に、其の材料は、之を庭園・草野・田畑・池・川・樹林・人類の社会等の如き生活の共存体に求め、之が配当は、簡より繁に進み且考察せしめんとする要部の最も善く発現せる季節に一致せしめんことを要す。而して地理教授等の進歩に伴ひ、生活の共存体としての地球に及すべきなり。自然の雑多なる、一々之を考察せしめんことは個より望むべからず。されば其の共存体より、特に関係多き緊要なる一二を採り、精密に之を観察せしめ、以て自然物の分類上、又は法則の帰納上に必要なる聯絡関係を理解せしむるに止めざるべからず。

(棚橋源太郎 1902 p92)

ここでも理科とのかかわりを説き、身近な事象にテーマを求めるよう繰り返している。彼が身近な事物をテーマとして取り上げていることの理由として考えられるのは、それが、先の引用に

---

もみられたように「直観に訴えること」すなわち「直観教授」に有効であるということである。直観教授とは、実物教授、開発教授または庶物指教ともいわれ、事物や具象物を利用した学習者の感覚的印象を通して認識の形成を図る教授の原理である。その理論はコメニウスやペスタロッチに代表され、日本には明治初期に米国を経由してもたらされた。稲垣忠彦によれば、ペスタロッチ主義もとづく教授方法導入は三つの時期に区分されるという(稲垣忠彦 1995 pp51-54)。そしてその第三期の導入は、高峰秀夫を中心にして進められた。高峰は、1875(明治8)年7月に日本を出発し、米国のオスウィーゴ師範学校において2カ年の課程を修めた。当時のオスウィーゴ師範学校は、ペスタロッチ原理に基づく教授法により後に米国の教員養成史上に名を残すオスウィーゴ運動の中心地となっていた。そして、高峰は、この運動の中核的な存在者であったクリュージ宅に住まい、教授方法だけでなく、多くの近代諸科学を学びとったという(村山英雄 1978 pp303-321)。高峰は、1878(明治11)年4月に帰国し、ペスタロッチ主義のもとづく教授方法を東京高等師範学校に導入した。彼によって東京高等師範学校の改革が進められたが、これが広く現実に普及したのは明治十年代後半から二十年代のはじめにかけてであった。棚橋が、岐阜の尋常師範学校に学んだのは、1885(明治18)年から1889(明治22)年で、東京高等師範学校で学んだのは、1892(明治25)年から1895(明治28)年であり、稲垣のいう開発教授の日本における広がりとうちょうど一致することになる。そうした時代背景もあり、棚橋はこの教授思想を自らの実践と研究に取り入れていたと考えられる。『小学各科教授法 全』においても、「直観」という言葉はたびたび登場するし、雑誌論説にも直観教授が題名となっているものが多い。くつかある。

ペスタロッチ主義のもとづく教育思想もあり、棚橋は実物を用いて教授することを有効としていたのだろう。そのためには、教授材料として理科教授の実験器具など教授用具として開発された教具を用いること、またそれだけではなく身近な事象に教授のテーマを求めることが肝要であったのだ。すなわち、棚橋は、身の回りにあるあらゆる事物が教育の材料になる可能性をもっていると考えおり、モノを用いて教授すること、身近なものを教材として教科の枠にとらわれずに教授すること、を信条としていたと言えるだろう。

#### 4) 博物館における研究機能の強化

1906(明治39)年に棚橋源太郎が教育博物館の主事となった。この年の第一回全国小学校教員会で、棚橋は教育博物館についての演説を行なったが、それによると「教育博物館は、特に教育の改善のために、教育者の智識を進めることを唯一の目的とすべきもの」とし、学校教育関係者や師範学校の生徒を利用の対象者として考えている。そのため、社会教育的役割は視野に入れておらず、教育博物館の任務とは、第1に「最新の教授用具、家庭、学校に於ける教育上の諸設備を、世間に向つて紹介し、推挙する」、第2に「内外国教育の過去、現在の状況を容易に知らしむること」、第3に「教育の理論、実際に関する智識を普及すること」とし、「臨時に小展覧会を開くといふことは、教育博物館の仕事としては、最も適当なことのひとつと考えます」と述べた

---

(棚橋源太郎 1906 p30)。

教育品の陳列については、展示すべきものを「内外国最新の教授用具、生徒用品、材具建築の模型」「最新の内外国教科書類」「諸学校の規則、一覧、教授細目、学校建築や学校生活の模様を写した写真絵画の類」「内外国諸学校生徒の成績品」「内外国教育史の資料となるべき教育品」の5つに分類して紹介している。

教授用具については、外国から最新のものを購入し比較研究することや、新しい教育用具をつくる製作所を附設してそこでつくったものを展示することを提案している。研究し、それをひろく教育関係者に示すことで、各地方の教育関係者が種々のものから選ぶことができるようにすることや普及させることを考えており、教科書を展示することも同様の考えにもとづいている。学校の規則や教授細目、建築や生活の様子、また国内外の生徒作品が展示内容としてふくまれているが、これらは国内外の教育状況や教授方法がわかるものとしてあげられている。すべてが教育研究と学校教育の質的向上をめざしており、博物館がそのための材料を提供するという考え方に根ざしている。これらの実現は、以前に『教育界』の臨時増刊号上で、棚橋があげていた改善案の実現にも通じることになる。

こうして、展示に加えて図書の閲覧サービスや講演会開催も事業としてあげている他、以下のような具体的な事業内容を提案している。来館者への展示品解説、学校からの教育品購入相談への対応、教具の研究、研究成果報告のための雑誌発行、地方の教育展覧会への資料貸し出しの5点がそれである。

すなわち、そのころの棚橋は、教育博物館とは教育にたずさわる専門家のための施設であって、ひろく社会教育のための機関であるとは考えていなかった。そして、利用者を教育関係者のみに限定した特別室を設けたり、教授用具研究会を開催したり、やがては雑誌『現代教育』を発行するなどしている。

では、棚橋はなぜ、教育博物館をひろく社会一般への教育機関としてではなく、学校教育に焦点をしばって、専門家のための機関としての役割を特化させようとしたのだろうか。棚橋が主事に着任した当時は高等師範学校の附属機関であったため、学校教育と深い結びつきのもとに企画を進めるといのは、妥当な選択だと考えられる。しかし、そのころ実際に博物館に来館していた人の多くは、棚橋も「本館を見舞うこと数回、幾多の来観者を見たのである、併しながら、小児・子守・素町人・試験の準備のため標本を借覧する学生・雑誌書籍を縦覧し、楽器を借り受けて練習する学生は、実に、其の重なるものであって、純粹の教育関係者らしき人は之を、見受けることが少なかった(棚橋源太郎 1903 p129)と述べているように、決して教育の専門家ではなかったようである。しかし、棚橋は「教育博物館が、此の如く、吾々が従事して居る附属小学校のやうに、日々、数十人の熱心な、真面目な、地方の教育家諸君を、送迎することを得ないのは、抑も何うした訳であらうか」と続けており、教育博物館が高等師範学校のように教育関係者のための機関として発展することを望んでいたし、そのことで館の特色が発揮されうると考えていた。

---

加えて、先に述べたように棚橋は、直観教授のためにさまざまな教具を用いた教授方法を実践することに努めていた。教育博物館を運営していくに際して教具を取り上げたことには、このような思いもあったと考えられよう。

棚橋が教育博物館の主事となったことで組織した「教授用具研究会」の活動は、相当に活発なものであったようだ。というのも、全国で使用されている鉛筆とノートは、それまで外国製が多く使われており大量に輸入されていたが、製造の可能性やその原料の調達先の調査までも及ぶ研究を行い、それらを国内生産させて日本全国はおろか中国やインドにまで輸出するほどまでになったという。これほどまでの影響力をもった研究会の実体とそこでの棚橋の様子は、後になって次のように語られている。

君が東京教育博物館長在任中創設せられた事業で吾人の忘れることの出来ない他の一は、学用品研究会である。東京高等師範学校教授後藤牧太先生を会長とし、君はその発起者主動者として市内の小中学校教育の実際に携わるもの竝に専門学者などを糾合し、毎週金曜日に会合して市内の製造業者より提出する学用品を審査し、適当なるには推薦証を与へ否事には改良点を指摘して、その研究を促した。審査は慎重を極めるものであった。会員は審査品を各々持ち帰り、児童生徒に使用せしめて見て、その結果を報告し合ひ、幾度も不合格を宣告した事もあり、また推薦を取り消したるものあった。為に学用品は改良せられ推薦証も真剣になって研究するに至った。当時にもっとも痛快な一事として、今も尚忘れ難いのは、外国製の鉛筆及びノートを日本の領土から駆逐したことである……君は常に審査主動者として活躍し、時々寄贈を閃かして改良法を示唆し、また断固として推薦証交付に反対した。(樋口長市 1938 pp119-122)

このことから、この研究会は、相当厳密な調査や研究を行って、その成果を公表していたと考えられる。そしてその成果公表の場とは、博物館の展示室や、雑誌『現代教育』だった。『現代教育』は、1913(大正2)年に、教育博物館に事務所をおく教授用具研究会の研究成果を発表するために創刊された。その第1号に掲載された「発刊の辞」によると、「内外教育最新の思潮の紹介、教育設備管理及び教育品に関する新研究の批判紹介、教育衛生、家庭及び社会教育の紹介、新刊圖書の紹介と批評」(後藤牧太 1913)という目的をもっていた。

ここでは、優良な教具を選定するということは、信頼のおける展示品を選定するということであったとも言えるだろう。研究会の影響力は大きく、製造業者にとっては驚異的な存在だったにちがいない。しかし、その分だけ教育関係者からの信用も獲得していたと考えられる。しばらくの間、古道具屋に行ったようだとの声もきかれていた教育博物館が、信頼と影響力を獲得するに至ったのは、研究に裏打ちされた信頼のおける品質という、展示されるだけのじゅうぶんな理由を背負ったモノが並ぶ場になったからということではないだろうか。棚橋は、教具の研究会を通して博物館の研究機能を強化したと言えるだろう。

では、棚橋が研究を基礎とした博物館活動を行うに至った背景はどこにあるのか。その手がかりを、棚橋の著作に求めてみたい。棚橋が教育博物館の主事になったのは1906(明治39)年のこ

---

とである。それまでに棚橋が著した著作は、『小学校理科教科書』（全5巻）、『小学校理科筆記帳』（全4巻）、『理科教授法』、『小学校各科教授法 全』、『尋常小学校に於ける実科教授法講義要領』、『ヒュース嬢教授法講義』、『理科教授法講義要項』、『尋常小学校に於ける実科教授法全』、『理科教授法講義全』、『実用教授法』、『New English Reader Based Upon A New Method』（全4巻）、『小学校理科教授書』（全4巻）、『手工科教授書』、『小学校理科教授書外篇』巻上・下である。『小学校理科教科書』（全5巻）は、その名のとおり小学校で使用する教科書で、『小学校理科筆記帳』（全4巻）とは、今でいうところのワークブックのようなものだろうか。それ以外の著作はすべて、教授方法について述べられたもので、これらはすべて1900（明治33）年に高等師範学校に勤め初めてからの6年間に書かれたものである。これらを著した背景として、棚橋は次のように語っている。

理科出身で教育教授の研究に没頭する人は少なくとも高師出身の中ではなかったの  
で、研究のし甲斐が多かった。実際理科的方面には開拓の余地がたぶんにあったのであ  
る。わたしの研究題目は無論理科の教授法が主題目であったが、それには学校園、校外  
教育、家事手工、それに初歩の地歴理科教授、観察科、直観教授の方面であった。

その中、今日でも最も深い感銘を尚持っているのは、第一部の初年級で郷土科の研究  
を実地に試みたことである。当時既に教授細目には観察科教授に該当する教材がないで  
はなかったが、本当に系統立ったものはなかったのである……非常に無理をしてドイツ  
の観察科、郷土科に関する教科書や教授法の著書を参考にして一ツ橋の学校を中心にし  
た教授案を作って之れを尋常三年四年といふ学校に実地に試みた。幸ひに、私の主任し  
ていた第一部は文部省でも研究の自由を或程度まで許されていたので、必ずしも当時の  
文部省の教則に拠らなくても比較的理想的な教科課程を作っても差支えないといふこと  
になっていたので、自由な研究が出来たのである。学校から初めて附近の丘や小川、或  
は上野公園、九段坂、両国橋辺りまでも子供を引出して、歩測や目測で地図をかかせた  
り、史跡を実地に就いて調べさせたり板橋や両国橋の上から貨物商品の集散する実況を  
観察などさせたものである。やって見た結果、生徒が他日歴史を学び遠方の地理に想像  
に於て、学習する素地を作る上に於て、相当効果があり、生徒としても少からず興味を  
以て学習した様子を目前に見て心ひそかに愉快を感じた。そこで、その研究の結果を明  
治三十六年一月に「実科教授法」として脱稿した。これで、当時余り問題にされていな  
かった観察教授、郷土科を問題にして徹底的に机上のみならず、実際的にも研究を試み  
た結果を公にすることが出来た。（棚橋源太郎 1938 pp115-119）

当時、東京高等師範学校は、初等教育の研究について日本における中心的役割を果たしていた。  
文部省から特権的な役割を与えられており、自由に研究することが許されていたのである。上の  
言葉から感じられるのは、棚橋はそのような研究環境のなかで諸外国からもたらされた理論の解  
題だけにとどまらず、児童との実践をとおした研究を行っていることに、大きな責任感と自信を  
持っていたということである。そして、これら教科書の執筆や教師向けの講演会などを通じてそ



---

の影響力の大きさについても認識していたのであろう。すなわち、棚橋は、高等師範学校での教授経験を通して、実践的で厳密な調査によって研究成果を出す手法を身に付けていたと同時に、その意義をじゅうぶん感じていたのだらう。その新しい実践の場として、教育博物館での研究会があったと考えられる。

手島精一が経営の中心にあったころの教育博物館は、教育道具のショールームのような存在であり、さまざまな教授用品を所蔵し理化学器械を全国に普及させたことが大きな成果となっていた。このため、棚橋が教育博物館における実践的な研究のテーマを「教具」にもとめたのは、当然のなりゆきとも考えられる。しかしながら、このように教育博物館が持っていた背景だけでなく、棚橋自身が教具を用いた教育を重視していたという内なる動機があったこと、その実践の場として教育博物館が有効であったこと、そして研究し成果を世に広めていくという手法をすでに身に付けていたからこそ、毎週のように研究会を開くほどまでに熱心に事業を進め、成果をあげることができたにちがいない。

## 5) 生活の中の科学

1912(大正元)年8月、文部省は、通俗教育調査委員の決議をうけて東京高等師範学校長に対して、教育博物館に通俗教育についての展示や講演をするように指示した。そこで、教育博物館では、新館と称していた建物を通俗教育に関する展示場とした。最初そこでは、天産、重要商品製造順序標品、理学器械及び器械模型、天文地学、衛生についての展示を行っていた。通俗教育についての事業を展開していくに際して棚橋は「差当り当館が経営せんとする事業を、自然科学及び之が応用に関する卑近なる器械標品模型絵画及び写真の類を陳列して、公衆の観覧試用に供する事、及び通俗の図書を備へて公衆の閲覧に供する事の二つに限りたり」とし、その展示内容を自然科学にしほっている。さきあげた5項目も理科の資料室を思わせるような、教科としての自然科学の枠にあてはまるような内容である。

しかし、その4年後から開催された特別展覧会のテーマは、コレラ、大戦、食物衛生、天然痘予防、廃物利用、家事、災害防止、生活改善、時、児童衛生、鉦物、計量、印刷文化、活動写真、運動体育、消費経済と続き、教科としての自然科学から、生活の中の科学へと変化している。教育博物館があつかうテーマは学校教育だけにとどまらず、一般の人々の生活に関わるさまざまな事象を科学という視点で理解することへと広がりを見せた。とくに、廃物利用展覧会、家事科学展覧会、生活改善展覧会、「時」展覧会、計量展覧会、消費経済展覧会は、テーマこそちがえど、その内容は全てが欧米を手本とした国民生活の改善をめざしている。この時代に棚橋が著した、生活改善や家事科等に関する論説には、いずれも欧米留学での生活や教育を視察した体験がいかされている。欧米の教育事情については、とくに家事科の進んでいることに注目し、その教授法の改善を図る必要を説いた。

各展覧会の開催主旨にもよくみられたが、棚橋は「国家富強の基礎が家庭に在る事は、今日何人も異論の無い所である」(棚橋源太郎 1920 pp2-4)、「家庭活動の中心たる主婦の作業能率の

---

増進といふ事は、実に国家富強の上に至大の関係を有し、随つてまた其の主婦の養成を以て任ずる学校に取つては教育上の重大問題である」(蘇川 1915) と言ひ、国家の繁榮は「政治、經濟、外交、軍事」といった「男子の為すべき事業」(棚橋源太郎 1918) だけでは得られず、国家富強の基礎は家庭にあり、主婦の作業能率の増進がそれを導くと考えていた。そこで、学校教育の改革とならんで、棚橋は、一般の主婦を直接的に啓発しようとしていた。その手段として用いられたのが、婦人雑誌への論説の掲載や各種展覧会の開催であった。

棚橋は、当時をふりかえり「そのころマスコミということが流行してきてラジオやジャーナリズムだけがマスコミじゃない。実物でマスコミをやらにやいかぬということになって、私が主事をやっておった東京高等師範学校附属東京教育博物館を文部省の直轄に移したんです……あそこでは盛んに展覧会をやった。博物館マスコミをやったんですよ」(棚橋源太郎、宮本聲太郎 1961 pp22-33) と語っている。すなわち、教育博物館の扱うテーマが学校教育における科学から一般生活における科学へとテーマを広げた背景には、文部省が通俗教育を推進させようとしたこと、博物館をメディアとして活用しようとしたことがあったのだ。

また棚橋は、続いて「当初に博物館というものの認識を世間に拡めようと思って社会教育方面に力を入れすぎた」とも言っている。世間一般に注目されるようなテーマを選ぶことで、その内容を伝えるだけにとどまらず、博物館についても広く一般に知ってもらおうとしていたことがうかがえる。

こうして棚橋の言葉をふりかえってみると、彼が特別展としておこなったさまざまな取り組みは、文部省からの依頼もあって社会教育に力を入れることや博物館をマスコミ的なツールとして使うための企画で、それらの活動を通して博物館そのものの存在をアピールしようとしていたと考えられる。が、マスコミ的に活用するといえども、そこでとりあげられるテーマは、教育博物館が独自に用意したものである。棚橋はなにをめぐしてこのようなテーマで特別展を開催することにしたのだろうか。

先にも述べたように、棚橋は、ベスタロッチ主義の直観教授の思想を取り入れており、その実践のためには、身近な事象を教育テーマとして採用することが肝要であった。たとえば、『小学校各科教授法 全』においては、学校教育における理科教育の在り方を次のように述べている。

本科教材の配列は、心理的・空間的に、児童の最も親近せる郷土の庭園・田畑・樹林・池川等の生活の共存体より初めて、漸次遠隔せる山林・海洋・地球等の如き共存会に及し、其等に於ける各種の自然物及び現象を、生態学的並に理化学的に考察せしめ、尚其等自然物及び勢力は、人類が之を征服し、利用せし歴史に遡り、其の次第を縦に考察せしめざるべからず。  
(棚橋源太郎 1902 pp92-93)

そして「教法」として、こう続けている。

理科教授の勉むる所は、自然物の性状を観察・比較・分類して、定義を作出し、現象を考察して、法則を帰納せしむるに在り。故に実科初歩教授並に平素の経験に於いて形成したる児童の思想界を以て、教授の出発点となし、実物及び現象を直観せしめ、其の

---

観察したる所は、之を類似せる実物現象と比較して、定義又は法則を概括せしめ、斬くして得たる定義法則は、更に他の場合に應用して、之を確實ならしめざるべからず。

(棚橋源太郎 1902 p93)

再び確認されたように、棚橋は生活に身近な事象に学びの材料を求めており、それをさまざまな科学の理解に用いて定義や法則を自ら見いだすことを重要視していた。

実物から学ぶこと、それを生活に直結させるということについては、ベスタロッチ思想だけでなく、岐阜で教えを受けていた昆虫学者名和靖の影響もあったと言えるだろう。名和は、害虫駆除の目的をもって昆虫の研究をし、棚橋の母校である華陽学校に籍をおき博物学や農業を教えていた。名和は研究の成果を以て講演会を行ったりしており、棚橋もその手伝いをしていた。棚橋は、生活に直結した名和の研究の在り方を実践的に学びとっていたと言えよう。後に「名和靖先生は私の小学校からの先生である」(棚橋源太郎 宮本聲太郎1962 p37)と語っているように彼から受けた影響は大きいものだったようだ。

教育博物館における社会教育は、文部省からの推進のもとに押し進められたとはいえ、そこで日常生活に密接に関わる親しみやすいことがらが特別展のテーマとして採用され、人々に関心を抱かせるに至ったのは、教育者としての棚橋の視点が当時の政策に有効に働くものであったからだろう。

特別展をしてマスコミ的に博物館を機能させたと棚橋は言っているが、決して科学的視点を置き去りにしていたわけではない。棚橋にとって、特別展覧会の開催は、博物館の社会教育機能の強化拡大のためという目的に加えて、留学によって得た西洋式の合理的な生活習慣を理想とする考えと、高等師範学校の学生だったころからの身近なものを科学的に見る目の2つが重なり合い、「生活を科学的にとらえて能率よく暮らし、国家の繁栄につなげる」という思想の普及をめざすための事業であったと思われる。それまでにつちかってきた科学的な思考や教育方法に関するノウハウを使い、博物館での特別展覧会をひとつのメディアとして利用した、とも考えられる。

特別展を女性の国民化の視点から論じている小山静子は、特に家事科学展覧会の主眼は科学思想の家庭への導入にあり、そこにおいては科学というものがクローズ・アップされてきていると指摘している(小山静子 1999 pp89-90)。すなわち、大正期に教育博物館で実施された特別展は、政府による通俗教育(1921年6月23日より官制上「社会教育」と用語が改変される)のための事業展開のひとつではあったが、そこには棚橋による生活の中の科学という視点が活かされていたのである。

## 6) むすび

後になって棚橋も語っているように、当時の高等師範学校は、日本における初等教育研究の総本山のような存在であった。毎日のように各地の小学校から授業見学にくる人たちがおり、また棚橋が樋口勘次郎とともに1903(明治36)年に著した『小学理科教科書 全』は、全国の多くの府県に採用されて広く普及していた(海後宗臣 1996 pp650-652)。先にあげたように、棚橋に

---

は教授方法を示した著作が多い。これら書物による教育思想と方法の伝播だけでなく、彼は教員向けの夏期講習会の講師なども務めており、日本の教育界におけるその影響力は相当のものであったろう。このように、自己の研究成果が全国に影響をおよぼし、教育の方法や道具が改められていくことを、棚橋はじゅうぶんに承知していたにちがいない。

そこで、師範学校の学生時代に学んだ直感教授の思想に基づく教育理念の実現の場として、高等師範学校だけでなく教育博物館をも有効に活用した。そこでは、師範学校における教授時代につちかった研究者としての手法が活かされた。こうして、教育博物館は教授用具研究会の活動を通して研究機能を強化していったのである。

また、特別展の実施においては、棚橋が理科教授に携わっていたころから身近なものに教材を求めるという考え方を持っていたことで、一般市民の関心をひくテーマで科学思想に基づいた生活改善を提案することとなった。彼が博物館で行ってきたことは、バスタロッチの直感教授に基づく実物を用いた学びと、研究に裏打ちされた教育や科学に関する思想と方法の普及で、それらは常に生活との結びつきを意識したものであった。彼が実現しようとしたのは、単なる理科教育の延長としての展覧会ではなく、社会への科学思想の普及であり、その背景には西洋情報と、教育者であり研究者である視点と手法が活かされていた。

#### 〈引用・参考文献〉

- 荒井孝喜 1991「棚橋源太郎先生著作目録(1)」『棚橋源太郎研究』4号
- 後藤牧太 1913「発刊の辞」『現代教育』1号
- 樋口長市 1938「リヤリズムの教育家棚橋君」『教育研究』486号 pp119-122
- 海後宗臣 1966『日本教科書体近代編第23巻理科(三)』講談社
- 本田増次郎、棚橋源太郎共訳 1902『ヒューズ嬢教授法講義』山海堂書店
- 稲垣忠彦 1995『増補版明治教授 理論史研究』評論社
- 石附実 1986『教育博物館と明治の子ども』福村出版
- 小山静子 1999『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房
- 倉内史郎、伊藤寿朗、小川剛、森田恒之編 1981『日本博物館沿革要覧』野間教育研究所紀要別冊 講談社
- 宮崎惇 1992『棚橋源太郎—博物館にかけた生涯—』岐阜県博物館友の会
- 村山英雄 1978『オスウィーゴ—運動の研究』風間書房。
- 佐藤優香 1998a「教育博物館における教育機能の拡張—手島精一と棚橋源太郎による西洋教育情報の受容—」『博物館学雑誌』23巻2号 全日本博物館学会 pp51-64
- 佐藤優香 1998b「棚橋源太郎による博物館の研究と経営(1)—棚橋源太郎の著作活動—」『教育学論集』第16号 甲南女子大学大学院文学研究科 pp49-69
- 佐藤優香 1999「棚橋源太郎による博物館の経営と研究(2)—大正期の東京博物館における特別展覧会を中心に—」『教育学論集』17号 甲南女子大学大学院教育学研究科 pp37-53

- 
- 蘇川生 1915 「閑却せられたる主婦の教育」『現代教育』278号（蘇川は棚橋源太郎のペンネームのひとつ）
- 棚橋源太郎 1902 『小学各科教授法 全』金港堂
- 棚橋源太郎 1903a 『実用教授法』金港堂
- 棚橋源太郎 1903b 「動植物及び整理教授洋品」『教育界臨時増刊東京教育博物館』3巻
- 棚橋源太郎 1906 「教育博物館」『教育研究』28号 p30
- 棚橋源太郎 1918 「女子と衣食住」『教育時論』1211号
- 棚橋源太郎 1920 「我が国民生活法改善の方策」『教育時論』1257号
- 棚橋源太郎 1938 「附属小学校時代の思出」『教育研究』486号 pp115-119
- 棚橋源太郎、宮本馨太郎 1961 「九十年の人生を旅して」ムゼイオン5巻4号 pp22-33
- 棚橋源太郎 宮本馨太郎 1962 『棚橋先生の生涯と博物館』六人社
- 内川隆志 2004 「E.P.ヒュース嬢と棚橋源太郎」『博物館学雑誌』29巻2号 pp63-73
- 山下成徳、上村英夫 1932 「棚橋先生が主事として就職せられたる前後の教育博物館の状態」『棚橋源太郎氏と科学教育』

## 棚橋源太郎業績一覧

発行年	月	タイトル	雑誌名	巻-号
1894	4	土筆の話	教育時論	324
1894	4	蜘蛛の話	教育時論	325
1894	5	松ノ話	教育時論	327
1894	5	麦ノ話	教育時論	328
1894	6	天牛ノ話	教育時論	329
1894	6	黴ノ話	教育時論	331
1894	7	からすがひの話	教育時論	333
1894	8	蓮ノ話	教育時論	335
1894	9	蛇ノ話	教育時論	340
1894	10	柿ノ話	教育時論	342
1894	11	鮒ノ話	教育時論	344
1894	11	地銭の話	教育時論	345
1894	12	燕ノ話	教育時論	348
1895	2	犬の話	教育時論	354
1895	3	楊ノ話	教育時論	357
1895	4	あぶらなノ話	教育時論	362
1895	6	御影石ノ話	私立兵庫県教育会雑誌	70
1895	6	蛙ノ話	教育時論	365
1895	6	豌豆ノ話	教育時論	367
1895	7	栗ノ話	教育時論	370
1895	9	高校小学校理科教授論	国家教育	42
1895	9	桃ノ話	教育時論	374
1895	9	草綿ノ話	教育時論	376
1895	10	高等小学校理科教授論(承前)	国家教育	43
1895	11	高等小学校理科教授論	国家教育	44
1895	11	條虫ノ話	教育時論	380
1895	12	高等小学校理科教授論	国家教育	45
1896	1	普通教育ニ於ケル鉾黄科	私立兵庫県教育会雑誌	77
1896	1	高等小学校理科教授論	国家教育	46
1896	1	珊瑚ノ話	教育時論	387
1896	2	高等小学校理科教授論	国家教育	47
1896	2	蜜柑ノ話	教育時論	389
1896	8	蟹ノ話	教育時論	393
1896	8	六週間在営中の所感及び見聞(上)	教育時論	407
1896	8	六週間在営中の所感及び見聞(下)	教育時論	408
1896	10	蚜ノ話	教育時論	415
1896	11	稲ノ話	教育時論	418
1899	6	兵式体操教授につきての卑見	教育時論	511
1899	8	理科教材を論ず	教育時論	515
1899	8	尋常小学校の理科	教育時論	517
1899	10	理科教材の史的方面を論ず	教育時論	523
1900	1	小学校理科教授細目の編纂につきて	教育時論	532
1900	8	直感的教授につきて	教育	6
1901	1	理科教材の統合	教育時論	566
1901	1	校外学習	教育界	1-1
1901	2	情意教育に於ける理科教授の価値(上)	教育時論	571
1901	3	情意教育に於ける理科教授の価値(下)	教育時論	572
1901	4	理科教授案(上)	教育時論	577
1901	5	理科教授案(中)	教育時論	578
1901	5	理科教授案(下)	教育時論	579
1901	6	教授の基礎としての郷土	教育実験界	7-12
1901	7	教授の基礎としての郷土	教育実験界	8-1
1901	7	校外教授の記	教育時論	585
1901	10	地理教授案例	教育時論	595
1901	11	小学校に於ける地理歴史理科の初歩教授	教育	21
1901	12	理科教授の方法を論ず	教育学术界	4-2
1902	1	理科教授上諸主義の調和	教育実験界	9-1
1902	1	地理教授上の諸問題	教育界	1-3
1902	1	初等教育に於ける近世外国語教授	国民教育	1
1902	1	高等師範学校教諭棚橋源太郎君の教育談	教育界	4-27
1902	2	地理教授上の諸問題(続)	国民教育	1-4
1902	2	直感的教授について	国民教育	2
1902	3	地理教授上の諸問題	教育時論	1-5

1902	3	郷土科教授	教育界	3
1902	4	郷土科教授	教育時論	4
1902	6	郷土科教授の一例(上)	教育時論	619
1902	7	地理教材とタイプ	教育学術界	1-9
1902	7	郷土科教授の一例(下)	教育界	620
1902	7	尋常小学校に於ける実科教授(上)	教育時論	622
1902	7	教授案上に於ける実科初歩教授の位置につきて	教育学術界	5-4
1902	8	地理教材の取扱方に就いて	教育界	1-10
1902	8	尋常小学校に於ける実科教授(中)	教育時論	623
1902	8	夏期校外授業の一例	国民教育	8
1902	9	尋常小学校に於ける実科教授(下)	教育時論	628
1902	9	夏期校外教授	国民教育	9
1902	10	地理教授と他教科の連絡につきて	教育界	1-12
1902	10	理科教授の効果を多からしむることに就て	国民教育	臨時10
1902	10	尋常小学校における実科教授(完)	教育時論	629
1902	10	小学校直感教授細目の一例	秋田県教育雑誌	123
1902	11	尋常科第二学年直感教授案例	教育界	2-1
1903	1	理科教科書は如何に用ふべきか	実験教授指針	2-1
1903	1	外国語教授の基礎としての帰化語	教育学術界	6-4
1903	1	教授雑論	日本之小学校教師	5-49
1903	2	尋常小学校に於ける実科教授問題は如何にしかく重大なるか	兵庫県教育会報	161
1903	2	教授雑話(承前)	日本之小学校教師	5-50
1903	8	英語教授法	教育界	2-10
1903	9	英語教授法	教育界	2-11
1903	11	動植物及び生理教授用品	教育界	増刊3-2
1903	11	実物教科品	教育界	増刊3-2
1903	11	英語教授法	教育界	3-1
1903	12	近世外国語教授の過去及現在	教育学術界	8-4
1903	12	英語教授法	教育界	3-3
1904	1	手工科教授上の諸問題	教育実験界	13-1
1904	1	近世外国語教授の過去及現在	教育学術界	8-5
1904	1	英語教授法	教育界	3-4
1904	2	如何にして自然科学諸分科材料を理科でふものに統合すべきか	日本之小学校教師	6-62
1904	2	手工科教授上の諸問題	教育実験界	13-3
1904	2	手工科教授上の諸問題	教育実験界	13-4
1904	2	近世外国語教授の過去及現在	教育学術界	8-6
1904	4	理科教授の方法に関する余輩が最近の研究	教育研究	1
1904	4	家事科教授	教育学術界	9-1
1904	4	オーシュミット氏実科教材論	教育研究	1
1904	4	新著紹介『教育教科書』	教育研究	1
1904	5	オーシュミット氏実科教材論を読む	教育研究	2
1904	5	佐々氏家庭への学級訪問	教育研究	2
1904	6	理科教授の方法に関する余輩が最近の研究	教育研究	3
1904	6	手工科教授の教育的価値に就きて	教育界	9
1904	6	英語教授法	教育研究	3-5
1904	7	理科教授の方法に関する余輩が最近の研究	教育研究	4
1904	8	オーシュミット氏実科教材論を読む(承前)	教育研究	5
1904	9	オーシュミット氏実科教材論を読む(承前)	教育研究	6
1904	11	オーシュミット氏実科教材論を読む	教育研究	8
1904	12	手工科教授の教育的価値に就きて	教育研究	9
1905	1	手工科教授の教育的価値に就きて(承前)	教育研究	10
1905	2	独逸に於ける近年の手工科教授の改良運動	教育研究	11
1905	3	小学校における英語科教授の目的につきて	教育研究	12
1905	4	校外観察に関する研究	教育研究	13
1905	5	実際の見地より見たる現今小学校の教授	教育研究	14
1905	6	小泉教授の『欧米教育の実際』を読む	教育研究	15
1905	10	学校園を觀る	教育研究	19
1905	10	戦時に於ける教育上の所感	神奈川県教育界雑誌(4)	6
1905	11	学校園を觀る	教育研究	20
1905	11	戦時に於ける教育上の所感(承前完結)	神奈川県教育界雑誌(4)	7
1906	3	海外の学校園	教育研究	24
1906	4	小学校に於ける学校園	教育公報	306
1906	4	理科教授統合案	教育学術界	増刊13-2
1906	4	中村不折君の繪画談	教育研究	25
1906	5	小学校に於ける学校園	教育公報	307

1906	5	小学校ニ於ケル学校園（棚橋氏の研究）	秋田県教育雑誌	175
1906	5	家庭の園芸	教育研究	26
1906	6	小学校に於ける学校園	教育公報	308
1906	6	外国語の教授に就きて	教育界	7-8
1906	7	教育博物館	教育研究	28
1906	9	国語読本中に於ける理科教材の取扱	教育研究	30
1906	10	国語読本中に於ける理科教材の取扱	教育研究	31
1906	10	見たり聞いたり	教育研究	31
1906	11	国語読本中に於ける歴史科教材の取扱	教育研究	32
1906	12	尋常国語読本中に於ける地理教材の取扱	兵庫県教育会報	207
1906	12	一生活共存体の方法的取扱（白花のオドリコサウ）	教育研究	33
1906	12	理科教授案例	教育研究	33
1907	2	生理衛生教授について	教育研究	35
1907	9	教具の研究	教育研究	42
1908	1	当今教授会の心理的観察	教育研究	46
1908	5	新学校令と理科教育	教育実験界	21-9
1908	7	教具の研究	教育研究	52
1908	8	教具の研究	教育研究	53
1908	9	教具の研究	教育研究	54
1909	1	吾附属小学校に於ける近時の研究	教育研究	58
1909	2	吾が附属小学校における近時の研究	教育界	8-4
1909	5	教具の研究	教育研究	62
1909	5	文部省開催の師範学校教育科講習会の実地授業研究	教育研究	62
1909	6	教壇雑話	教育研究	63
1909	7	教壇雑話	教育研究	64
1910	7	ハルツ山中の一週間	教育研究	76
1910	8	ハルツ山中の一週間	教育研究	77
1910	10	夏期殖民訪問の記（在伯林）	教育学術界	21-1
1911	5	独逸村落学校観察記（在伯林）	教育研究	86
1911	6	独逸村落学校観察記（在伯林）	教育研究	87
1911	7	独逸村落学校観察記	教育研究	88
1912	2	独逸初等教育の三大発達	教育時論	967
1912	3	博物学教授近時の傾向	教育界	11-5
1912	3	欧米に於ける家事科教授の実際	教育研究	96
1912	3	欧米初等教育近時の傾向	婦人と子ども	12-3
1912	3	独逸の小学校教師	日本之小学校教師	14-159
1912	4	欧米児童の学校外の生活	新女界	4-4
1912	4	欧米に於ける理科教授の概況	教育研究	97
1912	4	欧米初等教育近時の傾向	婦人と子ども	12-4
1912	4	英米教育近時の傾向	教育学術界	25-1
1912	5	欧米児童の家庭生活	家庭の友	10-5
1912	7	教授法近時の傾向	中等教育	15
1912	7	欧米の教育界と機関雑誌	教育研究	100
1912	9	小供の絵本読物の改良運動	小学校	13-14
1912	11	通俗博物館	教育時論	994
1912	11	欧米現時の理化教授法	教育界	12-1
1913	4	欧米近時の手芸科教授	手工研究	14
1913	5	独逸教員は両親と同権	国民教育	4-5
1913	6	通俗教育博物館施設の現況及将来の計画	帝国教育	371
1913	9	教授法近時の傾向	小学校	15-11
1913	10	欧米の教育と教育品の研究	現代教育	1
1913	11	生徒理科実験室の設備	現代教育	2
1913	12	展覧会の施設に就いて	現代教育	3
1914	2	数学科教材に関する近時の改造運動	現代教育	5
1914	2	校具教具及び学校設備に関する独文の雑誌	現代教育	5
1914	3	教具及び学用品の上に及ぼせる最近教授の影響	現代教育	6
1914	3	大正博教育学芸館前景気	現代教育	6
1914	3	教育品紹介	現代教育	6
1914	4	公共的世界的道楽心の養成	教育研究	122
1914	4	欧米の学校設備視察録	現代教育	7
1914	4	新教育品の紹介	現代教育	7
1914	4	内外国教育品研究の趨勢	現代教育	8
1914	4	先づ自然科学博物館を建設すべし	現代教育	8
1914	5	欧米近時の学校設備	現代教育	9
1914	5	教育品の紹介	現代教育	9



1914	5	大正博覧教育学芸館概評	現代教育	9
1914	5	新刊図書『子の対話』	現代教育	9
1914	6	教育品問題	現代教育	10
1914	7	教育工業近時の発展	現代教育	11
1914	8	教育工業近時の発展	現代教育	12
1914	9	学用品供給問題	現代教育	13
1914	10	時局と教具薬品材料	現代教育	14
1914	10	生徒の側から見た戸外運動	現代教育	14
1914	11	本邦産業の発展と初等教育	現代教育	15
1914	12	北欧の青年補習教育	現代教育	16
1915	2	英国の少女義勇団	現代教育	18
1915	2	新刊図書 統合『教育教科書』を読む	現代教育	18
1915	3	女学校の生物学教授	博物学会誌	19
1915	3	ボストン選挙日の一日	現代教育	19
1915	5	家庭作業能率の増進と家事科教授	現代教育	21
1915	5	香川県三豊郡和田小学校理科教授の実際	現代教育	21
1915	7	産業の発達上より見たる理科教授	教育実験界	37-1
1915	7	米国に於ける学校開放運動	現代教育	23
1915	7	黒板問題	現代教育	23
1915	8	児童の為に用意周到なる伯林市	現代教育	24
1915	10	紅葉の話 教材参考	現代教育	26
1915	10	校内設備としての学校博物館	現代教育	26
1915	11	実行上の工夫と熱心とに不足なきか	小学校	20-3
1915	11	実施上の工夫と努力とを欠ける我が教育界	現代教育	27
1915	11	運動場表面の構造に関する問題	現代教育	27
1915	12	閉却せられたる主婦の教育	現代教育	28
1915	12	小学校家事科教室の設備	現代教育	28
1916	1	幼児の手仕事に就いて	婦人と子ども	16-1
1916	1	学習上力の経済	教育実験界	36-1
1916	1	美的作出と鑑賞の教育	現代教育	29
1916	1	家事科用室の設備	現代教育	29
1916	2	理科教授上の諸問題	現代教育	増刊148
1916	2	学校衛生問題	現代教育	30
1916	2	各科教授用具蒐集案内	現代教育	30
1916	3	教育界は若く腐敗せるか	現代教育	31
1916	3	各科教授用具蒐集案内	現代教育	31
1916	3	独国教員師範卒業後の修養	現代教育	31
1916	4	学校外教育施設の新傾向	現代教育	32
1916	4	各科教授用具蒐集案内	現代教育	32
1916	5	学校経営の経済的方面	現代教育	33
1916	5	教具のセンター	現代教育	33
1916	5	各科教授用具蒐集案内	現代教育	33
1916	6	国民教育と博物館	教育時論	1121
1916	6	各科教授用具蒐集案内	現代教育	34
1916	7	高等小学校に於ける手工科	教育界	15-9
1916	7	保健調査と学校食事室	現代教育	35
1916	8	生徒の学習と図書館	現代教育	36
1916	9	砂糖の話 (台所の科学的研究)	婦人世界	11-10
1916	9	理科実験室設備の急務	教育時論	1132
1916	10	果物の話 (台所の科学的研究)	婦人世界	11-11
1916	10	近時の教育思潮と学校設備	現代教育	38
1916	10	新刊図書『幼年園』	現代教育	38
1916	11	展覧会経営に対する私見	教育界	16-1
1916	11	熱の話 (台所の科学的研究)	婦人世界	11-13
1916	11	近時の教育思潮と学校設備	現代教育	39
1916	12	茶の話 (台所の科学的研究)	婦人世界	11-14
1916		児童と博物館	児童研究	20-2
1917	2	人格教育説と理科教授	教育界	16-4
1917	3	学級教室の設備	現代教育	43
1917	4	遊戯の革新	教育時論	1153
1917	5	子供の家庭遊戯と玩具	児童	1-1
1917	5	独逸の育児法	婦人衛生雑誌	330
1917	6	学校設備用品雑話	現代教育	46
1917	6	理科教授と独創力	教育実験界	38-6
1917	7	社会教育施設としての講演及講習会	帝國教育	420

1917	10	中等学校博物科教授要目改訂改定の必要	帝国教育	423
1918	1	通俗教育館に就て	京都教育	307
1918	3	一新時期を制したる本邦理化教授	教育界	17-5
1918	5	学校図書館と学校博物館	教育時論	1190
1918	7	図書館並に博物館	小学校	臨時増刊
1918	7	教授法近時の傾向	小学校	臨時増刊
1918	7	廢物利用觀念の普及	教育時論	1196
1918	9	小学校に於ける理科及家事科の設備	現代教育	62
1918	10	家事科展覽会の開催につき	教育時論	1205
1918	10	小学校に於ける理科及家事科の設備	現代教育	63
1918	11	理科教授と科学的訓練	小学校	26-3
1918	11	家事科学展覽会と家事教育の刷新	現代教育	64
1918	12	男子と衣食住	教育時論	1211
1919	1	本邦社会教育の不振	教育時論	1214
1919	1	衣食住の科学的研究	斯民	14-1
1919	2	若き主婦の覚醒	婦人界	3-2
1919	3	社会教育従事者養成の急務	教育界	18-5
1919	3	社会教育上の諸問題	教育論叢	1-3
1919	4	理科教授と博物館	現代教育	69
1919	5	災害防止と学校教育	教育時論	1226
1919	9	日常生活の改善	教育時論	1239
1919	10	科学博物館建設の急務	東京朝日新聞	10月3日
1919	10	科学博物館建設の急務	東京朝日新聞	10月4日
1919	10	科学博物館建設の急務	東京朝日新聞	10月5日
1919	10	本邦婦人の頭腦を改造せよ	婦人問題	3-4
1919	11	教育的觀覽施設講習会講演要領觀覽的施設と学校教育	防長教育時報	240
1919	11	生活改善に対する吾人の態度	小学校	28-3
1919	11	婦人の覚醒を望む	処女の友	2-11
1919	11	教具中央機関	現代教育	76
1919	12	生活改善に対し教育者の執るべき態度	現代教育	77
1920	1	最近に於ける生活改善の傾向	婦人界	4-1
1920	2	生活改善の諸問題	斯民	15-2
1920	2	教育設備用品研究の急務	現代教育	79
1920	3	国民生活改善の方策	教育時論	1257
1920	5	社会教化から学校教育へ	教育論叢	3-5
1920	5	時間尊重の美風を養成すべし	教育時論	1262
1920	6	生活改善運動回顧	明日の教育	
1920	12	社会教育的觀覽施設	帝国教育	461
1921	1	改善すべき我國の結婚	婦人界	5-1
1921	2	生活改善とは何か	社会と教化	1-2
1921	2	改めたい日本の服装	処女の友	4-2
1921	7	計量道德の向上	教育時論	1305
1921	8	内面生活の改善	秋田県教育雜誌	344
1921	10	お嫁入支度の改良	処女の友	4-10
1921	11	研究心に乏しい日本の婦人	婦人世界	16-11
1922	8	本邦の博物館施設	教育時論	1345
1923	1	児童消費經濟	婦人衛生雜誌	369
1923	1	生活改善の主義で挙げた私どもの質素な銀婚式	婦人世界	18-1
1923	2	嫁入支度より貯金の通帳	婦人世界	18-2
1923	2	児童と消費經濟	教育論叢	9-2
1923	4	洋食当も和食当も大歓迎の新しい献立	婦人世界	18-4
1923	9	小博物館の問題	社会教育 (1)	5-8
1923	11	此際を機し断然廢したい弊風と永続させたい美風	婦人世界	18-11
1924	1	果然今度の大地震は生活改善の急務を裏書した	斯民	19-1
1924	12	博物館と教育	教育時論	1421
1926	3	大戦後独仏対抗の一面	教育時論	1466
1926	4	独仏における教育現状	教育研究	301
1926	4	仏国の教育現状	教育研究	302
1927	5	最近独仏の国民生活に就て一	斯民	22-5
1927	6	最近独仏の国民生活に就て二	斯民	22-6
1927	7	最近独仏の国民生活に就て三	斯民	22-7
1927	8	最近独仏の国民生活に就て四	斯民	22-8
1927	9	最近独仏の国民生活に就て五	斯民	22-9
1927	9	生活の改善	家事及裁縫	1-6
1927	10	生活の改善	家事及裁縫	1-7

1927	11	生活の改善	家事及裁縫	1-8
1927	12	生活の改善	家事及裁縫	1-9
1927	12	花嫁十訓	婦人世界	22-12
1928	3	博物館の宣伝	博物館研究	2-3
1928	3	博物館宣伝と新聞其他の刊行物	博物館研究	2-3
1928	3	博物館宣伝実例	博物館研究	2-3
1928	3	死博物館から活きた博物館へ	博物館研究	2-3
1928	8	美術工芸の博物館に就て	博物館研究	1-3
1928	11	地方博物館問題	新民	23-11
1929	5	博物館説明札に関する諸問題	博物館研究	2-5
1929	5	博物館の説明札に就て	博物館研究	2-5
1929	6	博物館の組合せ陳列法	博物館研究	2-6
1929	7	思想善導と教育の改善 (教化事業調査会協議会記事)	社会教育 (1)	6-7
1929	8	博物館動植物園と児童の教育	教育研究	346
1929	8	大学教育に於ける博物館の位置	博物館研究	2-8
1929	9	科学産業の博物館問題	博物館研究	2-9
1929	9	博物館施設近時の傾向	博物館研究	2-9
1929	9	壁画保存法	博物館研究	2-9
1929	10	博物館研究近時の傾向 (承前)	博物館研究	2-10
1929	10	陳列品の説明札に就いて	博物館研究	2-10
1929	11	博物館施設近時の傾向	博物館研究	2-11
1929	11	博物館の種類及び其の定義	博物館研究	2-11
1930	1	郷土博物館問題	博物館研究	3-1
1930	2	児童博物館の施設	児童教育	24-2
1930	2	学校博物館問題	博物館研究	3-2
1930	2	新式の地方博物館の一例	博物館研究	3-2
1930	3	児童博物館の施設	児童教育	24-3
1930	3	教育博物館問題	帝国教育	571
1930	3	学校博物館問題 (承前)	博物館研究	3-3
1930	3	地方博物館の一例	博物館研究	3-3
1930	3	米國に於ける路傍博物館に就いて	教育研究	354
1930	4	児童博物館問題	博物館研究	3-4
1930	5	米國に於ける路傍博物館に就いて	博物館研究	3-5
1930	6	社会教育機関としての博物館・動植物園・水産館	教育論叢	増刊23-6
1930	6	博物館建築家に望む	博物館研究	3-6
1930	7	世界の動物園	博物館研究	3-7
1931	1	組み合わせ生態陳列近時の発達	博物館研究	4-1
1931	1	郷土教育の一考察	教育研究	367
1931	2	発明研究与博物館	博物館研究	4-2
1931	3	学校と博物館	教育時論	1646
1931	4	郷土博物館問題	郷土	6
1931	4	瑞典の郷土博物館に就て	教育研究	370
1931	8	丁抹の舊い町博物館	博物館研究	4-8
1931	10	古書古文書の鑑査実験室	博物館研究	4-10
1931	10	討議 (小田内通敏との)	博物館研究	4-10
1931	11	討議	博物館研究	4-11
1932	1	社会教育普及徹底を期す	帝国教育	593
1932	3	郷土博物館と社会教育	博物館研究	5-3
1932	3	博物館分館制	博物館研究	5-3
1932	4	本邦博物館施設の概観	郷土教育	18
1932	4	郷土博物館の本質と機能	博物館研究	5-4
1932	4	ゲーテ国立博物館	博物館研究	5-4
1932	5	博物館の盗難	博物館研究	5-5
1932	5	カーネギー財団の博物館事業援助	博物館研究	5-5
1932	8	郷土博物館に関する諸問題	博物館研究	5-8
1932	8	ラブラタ博物館 (大学博物館の一例)	博物館研究	5-8
1933	3	国立ゲーテ博物館	博物館研究	6-3
1933	3	本邦将来の博物館施設	博物館研究	6-3
1933	6	博物館の歴史	博物館研究	6-5,6
1933	7	博物館の歴史	博物館研究	6-7
1933	8	公民教育と郷土博物館	公民教育	3-8
1933	8	博物館の歴史	博物館研究	6-8
1933	10	博物館の歴史	博物館研究	6-10
1933	11	博物館の歴史	博物館研究	6-11
1933	12	(本邦空前の教育展・近世教育史料展覧会) 感想	帝国教育	639

1935	2	石川理事を偲ぶ	博物館研究	8-2
1935	5	帝室博物館復興工事の概況	博物館研究	8-5
1936	1	黎明期の手工教育	手工教育	186
1936	9	はびこる迷信を打破せよ	家の光	9月号
1936	11	社会教育座談会	帝国教育	697
1937	8	生活改善運動の過去現在	道徳教育	6-8
1937	11	何の因縁、動機で私の境遇は作られたか	教育週報	652
1938	3	社会風潮座談会	帝国教育	713
1938	9	附属小学校時代の思出	教育研究	486
1940	8	新東亜建設と博物館教育	博物館研究	13-8
1940	8	教育団体と連絡協議部会	帝国教育	742
1941	4	時代思潮と女学生服の変遷	家事及裁縫	15-4
1941	12	郷土博物館の諸問題	博物館研究	14-12
1942	12	博物館学芸員の重要性	博物館研究	15-12
1943	2	科学工業博物館の先駆、巴里のコンセルバトアール	博物館研究	16-2
1943	8	近く建設されるべき大東亜博物館の性格	博物館研究	16-8
1944	7	博物館従事者の問題	博物館研究	17-6.7
1944	12	博物館蒐集品の加工製作	博物館研究	17-10.11.12
1947	3	新幹部を迎ふ	博物館研究	復興1-1
1948	3	国立公園の戸外教育施設	博物館研究	復興2-1
1948	7	中央人類学博物館の構想	博物館研究	復興2-2
1949	7	郷土博物館の将来	教育と社会	4-7
1950	3	博物館動植物園法の制定	博物館研究	会報8
1950	5	博物館と動植物園とはなぜ同一法で律するを可とするか	博物館研究	会報9
1952	9	博物館新建設の好運機を迎えて	博物館研究	会報16
1952	9	本邦博物館機構の改善	棚橋源太郎研究	5
1953	5	岡山に欲しい中央博物館	博物館研究	会報21
1953	7	学校と博物館	博物館研究	会報22
1955	10	資料?英国博物館協会学芸員免許試験問題	博物館研究	28-10
1955	12	学校博物館問題につき金子氏に答える	博物館研究	28-12
1956	1	本邦に実現したい歴史博物館体系の構想	歴史教育	4-1
1957	11	学校と博物館	教育学研究	24-5
1958	9	博物館学講座に期待するもの	ムゼイオン	2
1958	10	理科教育の思い出	理科教室	33年10月
1960		国立科学博物館の拡充に曙光	ムゼイオン	5
1961		博物館事業に捧げた50年	ムゼイオン	8
1961		90年の人生を旅して	ムゼイオン	5-4